

被災から防災へ、ローカリティからネットワークへ

婦人相談員のための『災害時相談対応ハンドブック』作成と研修の経験から

From victimhood to disaster preparedness, and from intra-community bonds to cross-community networking:

Women's advocates create "Handbook of Disaster Support for Women"

村本 邦子

Kuniko Muramoto

立命館大学

Ritsumeikan University

Key words: disaster preparedness, intra-community bonds, cross-community networking

十年以上にわたり全国の婦人相談員たちと協働するなかで、対人援助職の学びの中核は振り返り (reflectivity) にあることを強調してきた(村本、2010)。2016年の熊本地震後、被災した相談員たちの声を受け、被災時の相談対応を振り返る研修を行った。阪神・淡路大震災、東日本大震災時の声も集められ、2017年、婦人相談員のための『災害時相談対応ハンドブック』が作成され、全国大会で基調講演とともに全会員に配布された。2018年には、このハンドブックを使った研修を全国で行っている。その間にも、あちこちで新たな災害が発生している。発表者もこれらの経験から多くを学ばされ、自分自身も振り返り (reflection) の作業をすべきだと考えた。本研究では、対人援助職者の被災と防災についてあらためて考えてみる。

方法

ハンドブック作成プロセスと現在進行中の研修を振り返り、アンケートやその後の参加者の声も参照しながら、対人援助職者と被災と防災について省察する。

結果

上記のような経過を経て、2017年11月ハンドブックが完成した。2018年4月より、婦人相談員を中心に周辺の支援者も含め、地域ブロックごとにこれを使って研修を行っている。東海34名、中国・四国23人、近畿30人、北陸14人、北海道・東北58人が参加した。この後、関東、九州での研修を予定している。非常に好評であり、自分の職場や地域でも実施したいという声、継続的に開催されることを求める声が多い。

この研修で起こっていることを振り返ってみると、被災体験を持つ相談員と持たない相談員がグループで語り合うことで、まだ消化されていない被災による影響を自覚し、仲間たちのサポートを受けて乗り越えていく契機になると同時に、どこかで被災を他人事と感じていた相談員たちが我が事として受留め、防災意識を向上させていた。そもそも参加者はみな相談支援者なのである。研修を経て、実際に被災した相談員たちは、研修で話し合ったことが直接役立ったこともあ

れば、そうでないこともあったが、いずれにしても、仲間たちと語り合ったこと、その絆を思い起こし、災難が降りかかっても何か手立てはあるはずだという自信や有能感を維持することにつながっていた。

考察

災害後の混乱期、助け合えるのは距離的に近い地域コミュニティであるが、情報や物資、人力でもって支援ができるのは、逆に災害の影響を受けていない遠隔地である。研修では、「近くのネットワーク、遠くのネットワーク」という言葉を使用した。地域に根差した多職種での研修を行い、関係と共通理解を作ると同時に、遠方に広がる助け合いのネットワークを作っておくことが有効である。婦人相談員たちは普段から広域の連携を行っているため、今回、それに向けた大きな一歩を踏み出すことができたと言える。矢守(2009)は「防災の実践共同体」と呼ぶが、このような取り組みを経て、公私ともに被災にうまく対処する力を育て、防災・減災を目指していくことができるだろう。また、日常と緊急時は地続きであり、女性支援に関しても、日常の対応がなされることが緊急時の問題を防ぎ、緊急時の体制を整えることが日常の対応を向上させることも確認された。このような取り組みによって、日常的な支援も向上するものと考えられる。

今回の取り組みは第一歩にすぎないが、これを継続していく方法を模索するとともに、他の対人援助職においてもこのように被災と防災をつなぎ、ローカリティとネットワークを結ぶ取り組みができないかを検討していきたいと思う。

参考文献

村本邦子(2010) 「支援者支援という対人援助の可能性～女性支援構築のための婦人相談員研修の実践から」望月昭・サトウタツヤ・中村正・武藤崇編『対人援助学の可能性』福村出版 p.167-184
矢守克也(2009) 『防災人間科学』東京大学出版会